

KODOMO TOSHOKAN



貝の鈴

山口勇子



《著者紹介》

やま ぐち ゆう こ
山口 勇 子

1916～

広島生まれ。広島県立広島高等女学校卒業。
「子どもの家」同人。おもな著書に「少女期」
(理論社)「スカーフは青だ」(新日本出版社)など
がある。日本児童文学者協会会員。

《画家紹介》

いわ さき
岩 崎 ち ひ ろ

1918～

東京生まれ。府立第六高等女学校卒業。現在、
絵本、さし絵などで活躍している。おもな絵
本に、「あめのひのおるすばん」(宝光社)「若い
人の絵本 シリーズ」(童心社)などがあり海
外でも出版されている。童画ぐるーぶ「車」
同人。児童出版美術家連盟、日本美術会所属。

NDC 913 山口勇子

貝 の 鈴

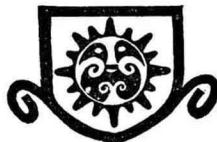
山口勇子

大日本図書 1970

97 p. 22cm

小学校中・高学年向

子ども図書館



1970年 7 月 30 日 第 1 刷発行

1974年 7 月 10 日 第 11 刷発行

著者 山口勇子／発行者 佐久間裕三／発行
所 大日本図書 東京都中央区銀座 1－9
－10 〈〒〉 104 東京 (03) 561－8671～9
振替 東京 219 番／印刷 東洋印刷／製
本 岸田製本

貝 の 鈴 © 1970 山口勇子

8393-217444-4393

貝の鈴——山口勇子



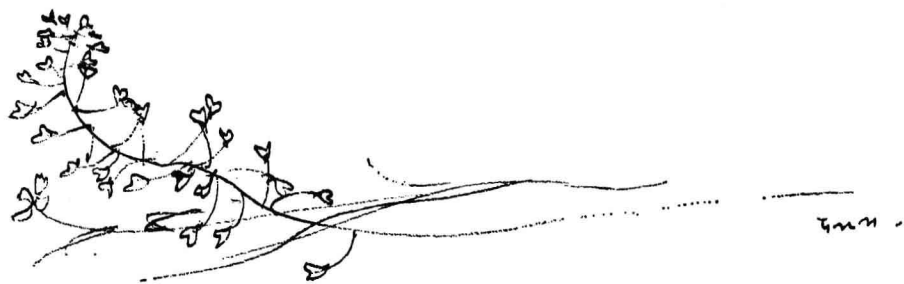
大日本図書——子ども図書館

もくじ

貝の鈴・5

わたしのプレスラウ・83

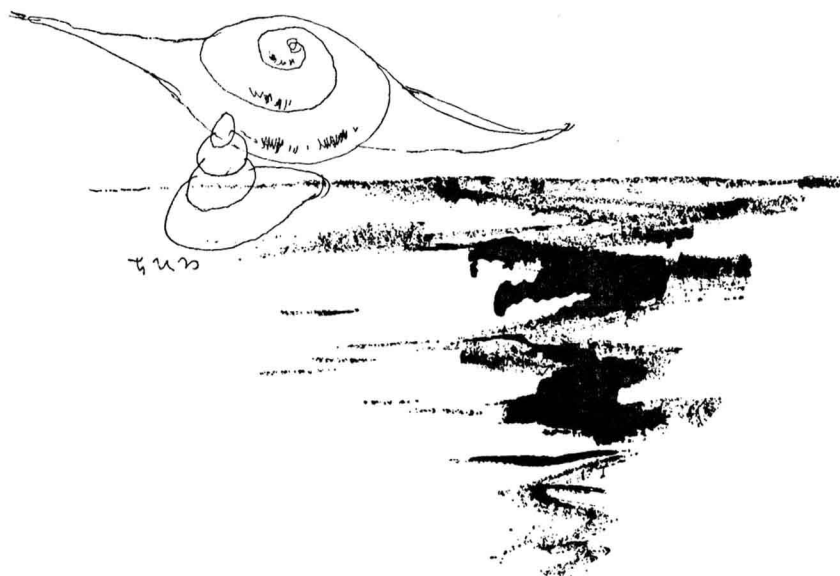
真実を話すことのたいせつさⅡ鳥越 信



装幀・画

岩崎
ちひろ

貝
の
鈴^{すず}



この夏休み、みどり島での一カ月余のことは、たぶんいつまでもわたしの胸の中で、生きつづけることと思います。そうです、断崖の上から見た海の、あの、きわだったあおさとともに。そして、松の枝えだをふきならした風の音とともに。

夏が終わり、広島市のわたしの家に帰ってきて、こうして机にむかっている、わたしをとりかこんで、波が光りながらおどっています。だれでもおまえたちの年ごろには、ちよつとのことを大げさに考え、すばらしい夏だった、なんて思うものさ、とおとなたちはいうかもしれない。「去年の夏もことしの夏もおんなじさ。暑いばかりだよ。」といわれそうです。

でもやはりわたしにとってはちがいます。やはり特別な夏でした。そこでわたしは、この夏のみどり島のことを、くわしく書いておくことにきめました。こまかいところまで思い出して、ていねいに書いておこう、そうすればいつでもとりだして読めるもの、ときめたのです。

きょうから二期、わたしはいつもどおり、水色のジャンパースカート、白ブラウスの夏の制服で登校しました。そしてひさしぶりに会ったクラスのともしちとおしゃべりをして、教室の掃除もまじめにやって、帰ってきました。

広島市立第三中学校、二年三組、市田みのり、満十三歳と八カ月、身長は……そんなことどう

でもいい、つまりこれがわたしです。つけ加えると、いちばん好きなのはなんといっても海、みどり島の海です。海を見ること、泳ぐことです。海の水を、ことにみどり島の東の入江から少し沖のほうの海水を、わがものがおに口に入れたり出したりしながら泳ぐことです。泳ぎの中では平泳ぎが、いちばん好き。顔半分を海の中にしずめたままで、静かに進むのです。おっと、おしやべりが横にそれてしまいました。わたしのくせ。だからかあさんがいつも、

「ほら、みのり、要点だけさきに。」
って、おこるのです。

夏休みがくると、わたしは毎年、みどり島のおばあちゃんの家に行きます。ひとりで行けるようになってからは、毎年行っています。たしか小学校二年生くらいからです。夏休みが近づくと、かならずおばあちゃんからはがきがきます。

『みのりさん、ことしも待つとるからね。』

はがきを見て、かあさんはいつもいいいます。

「ことしも、もう夏休みね。」

もちろんわたしは、待ちかまえている夏休みのこと、いそいで荷物をへやじゅうにひろげ、なん日もかかってかばんをぎゅうづめにするのです。

おばあちゃんはみどり島の海岸通りに、ひとりでくらしています。小さい雑貨店をしているのです。ノートやマツチ、せんたくばさみ、それからせともの類、なんでもあります。おばあちゃんはおとんど一日じゅう、店のまん中にすわっています。お客がくると、「はいよ。」と手をのば

して、品物をさしだします。ハミガキがどこにあるかも、マッチの大箱おおぐさこにならんで箸立はしだててがあることも、店じゅうのなにかも、おばあちゃんは目をつぶってもわかるのです。けれど夕方になると、「つかれたのう。」と奥おくのへやに枯れ木かきのようにころがります。

わたしは毎年、みどり島に行くまえには、ことしこそ、店番をかわってしてあげよう。きっとおばあちゃんの手伝いてだをたくさんしよう、と思うのです。ことしも行くまえには胸むねの中でかたくなりかいました。それで、

「かあさん、みのりねえ、おばあちゃんの手伝いてだ、うんとしてあげるよ。」

といったのですが、

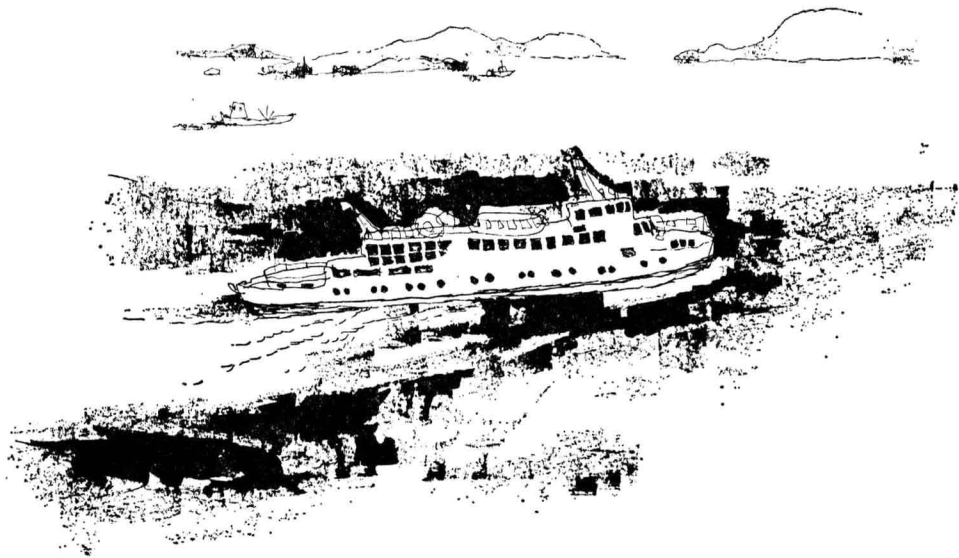
「へえ、ほんとかねえ。みのりはいつもあそんばかりいるらしいじゃないの。おばあちゃんもあまやかすからいけないのよ。どしどし用事をいつけりゃいいのに。」

と、おばあちゃんに「用事をいつけろ」と、はがきでも書きかねない口ぶりなのです。

「ううん、ことは手伝いするよ。ぜったいよ。」

わたしはふんがいていいかえたのですが、結果けっかはやはり、手伝いてだに關かしてはざんねんながら、かあさんのいうとおりになっていました。そういえば去年きょねんの夏は、島のともだちつ子つこと、立ち泳ぎたておよの競争きさうそうに熱中ねつちゅうし、そのまえの年の夏は、大きなしだの葉でかごをあむことに夏じゅうかかり、やつぱりおばあちゃんの手伝いてだどころではなかったのです。

わたしの家からバスで三十分、広島市ひろしまの南端みなたん、宇品港うしなこうにつきます。そこから船にのりこむと同時にわたしの夏が始まります。船のてすりからのぞきこむ海は、スクリーンにかきまぜられて、



たえまなく泡立ちます。きりひらかれる海からは、海の話し声が聞こえてきます。船の振動音にまじって、すぎとおる海の声が、泡といっしょに立ちのぼります。

海の話し声を聞くのは、気持ちのよいものです。港を出て、ものの三十分もすると、わきあがる泡もすみきったあおさになります。そのころからずっと遠くに、小さい島じまが見え始めます。海上に浮きあがって見える島じまは、一面に太陽をあびてまぶしいほです。いえ、まぶしいのは島じまばかりではなく、海のすべてがまぶしいといえます。船はそんな、まぶしさのまっただ中を、うなりをあげて進みます。

宇品港から約二時間四十分、なつかしいみどり島が見えはじめると、わたしはいつも、どうしたわけか胸がいっぱいになるのです。小さい島じまをしたがえ、濃い島かげを海ににじませていくみどり島は、わたしにとってやはり特別な島なのです。

みどり島の棧橋に船が着くと、わたしはいちばんさきにおりることにしています。ことしももちろん、まっさきにとびおりました。

二

海岸通りの店の前で、おばあちゃんは海風にまえかけをふくらませて立っていました。またまた店の前にでてきた、といったふうに立っているのですが、わたしが着くのをもう二十分も三十

分もまえから、首をのばして待っていたにちがいありません。

「おばあちゃあん。」

わたしが両手に荷物をぶらさげたまま走りよると、おばあちゃんは顔じゅうでわらいました。

顔じゅうをしわくच्याにしたわらい方でした。わらっているのか泣いているのかわからないような顔でした。

「おばあちゃん、どうかしたの。」

わたしは思わず聞きました。

「なにね、どうもするもんかね。このとおり元気よのう。」

「でも泣きわらいみたい。またしわがふえたね。」

「しわがふえるのはあたりまえ。一年に十本ずつふえるよのう。」

おばあちゃんはそういつて、またしわくच्याの顔で泣きわらいをしました。なん年も、なん十年もひとりぼっちでくらしていると、あんな泣きわらいの顔になるのでしょうか。でもおばあちゃんはがっしりとわたしの荷物をうけとり、うきうきと店の中にはいつていきました。なにひとつ、去年とかわからない家です。

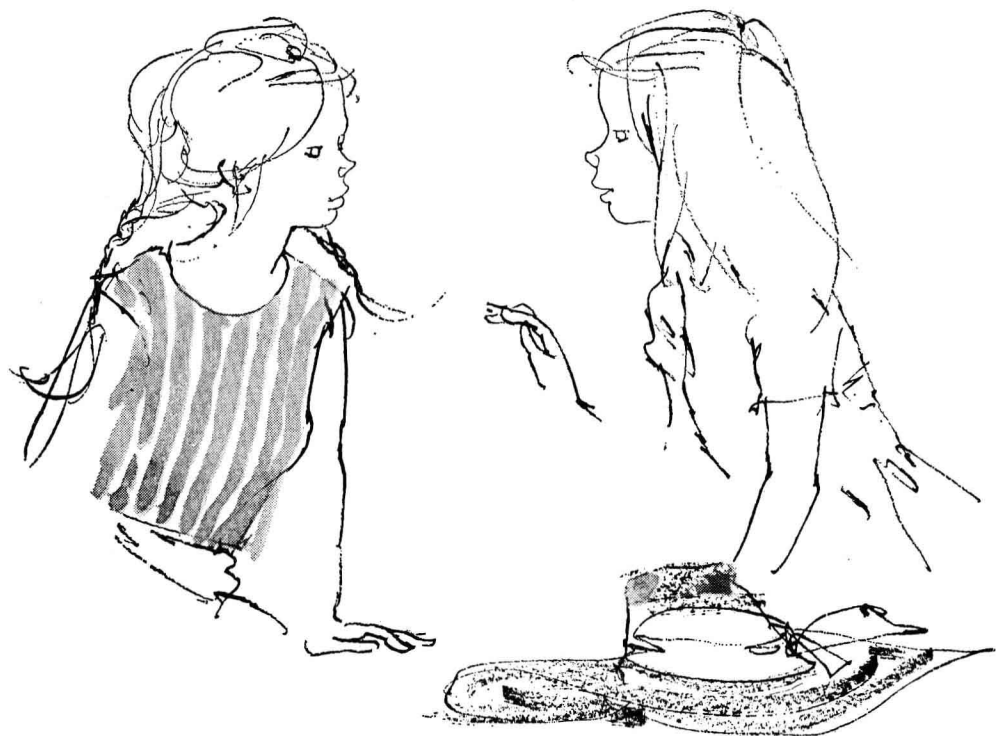
「いやあだ、こんなもの、まだあるわ。」

去年、わたしが作ったリボンの造花が、まだそのまま柱の竹づつにはいつていました。

「みのりさん、きたんじゃね。」

おもてから声がありました。りつ子です。

「わっ、りつちゃん。わたし今の今、たった今、着いたばかりよ。棧橋あがるとこ、見てたの？」



「ううん、見とらんでもわかるよ。」

りつ子はすました顔であがってきました。ふたりは顔を見あわせて、思わずにやつとしました。一年ぶり、ちよつぱりおたがいにてれくさかったのですが、それもほんの十秒間ぐらいのことで、すぐにどつちからともなく、

「うふっ。」

「はっはっ。」

と、肩をくつつけあって大声をたてました。わたしと同じく、中学二年生のりつ子は、あいかわらず細い目で、よくわらい、よくしゃべるりつ子です。

一カ月あまりの夏休みの間に、わたしたちは一年分のおしゃべりとあそび、泳ぎをしてしまわなければなりません。なんといそがしいことでしょう。

わたしは去年の九月から今までの、約十一カ月のこと、特にわたしのクラスの人びとのことについてしゃべってしまわないと、おちつかない気持ちです。りつ子のほうだってまけてはいません。まるで、競争のように、みどり島の十一カ月のできごとを、あちこちにとびながら話してしまおうとしますのです。かと思うと、

「それはそうと、井上さんはどうしとる？　ほら、たまきさんとかいった……。」

などと、りつ子は見たこともないわたしのクラスのともだちのことを聞いたりします。去年の一学期半ば、わたしのクラスに転校してきた井上たまきさんのことです。転校してきたすぐの日から、クラスじゅうの人気をかつさらった井上さんの話をりつ子にしたのは去年の夏休みだったのに、りつ子はよくおぼえているのです。

「ますます人氣絶頂よ、なにしろね、なんでもかんでも、いちばんの優等生なんだから。」と、わたしがいうと、

「ふーん、そんな人すかん。わたしだったらね、ふん、のさばらしてなんかおくもなかね。みのりさんらのクラスは、みんないくじなしなんじゃね。」

りつ子は縁さきに腰かけた足を、はがゆそうにぶらんぶらんさせるのです。ほんとに、元氣者のりつ子のような人が、わたしのクラスにひとりでもいてくれたら、と思うことがなんともあります。

「そうそう、うちのとなりのしげおじさんがね、けがをしたんよ。」

「まあ、船で？」

「あれ？ しげおじさん、去年の夏はまだ島におったかいね。」

「定置網のしげおじさんでしょ、もちろん島にいたわよ。ほら、船にのせてもらったじゃないの。」

「おお、そうじゃったねえ。あれからね、大阪のほうに働きに行ったんよ。」

「じゃ、もう漁はやめたのね。」

ことしも船にのせてもらおうと、楽しみにしていたわたしは少しがっかりしました。

「うん、それが一カ月くらいまえにね、車にはねられて大けがをしたいうて、電報がきたん。それで、しげおじさんとこのおばさん、大いそぎで大阪に行っちゃったんよ。」

「まあ、大けが？」

「さあ、もうだいぶんええいうことよ。そいでね、てるぼうを今、うちであずかつとるんよ。」
てるぼうは、しげおじさんのひとりむすこです。たしかまだ三つにもならないくらい小さい

男の子です。

「あのね、しげおじさんがずうっとむかし、戦地^{せんち}からもって帰った貝^{かい}があるんよ。ふると、鈴^{すず}みたようにチロ、チロ、いうて鳴るんよ。」

「まあ、貝^{かい}がらが鈴^{すず}のように？」

「うん。」

「見せてよ、ねえ、見せて。どんな貝？」

「うん、あとね。」

そういつて、りつ子は「うふっ」と肩^{かた}をすくめてわらいました。

「あら、どうしてわらうのよ。」

「ううん、なんでもない。」

そんなことをいっているうちに、話はほかのほうにうつってしまったのです。

その夜、おばあちゃんは早くからふとんをしき、横になってうちわをばたばたさせていました。

「みのりさんとならんで寝^ねるのも、一年ぶりじゃ。」

わたしもならんで寝^ねころがり、同じようにうちわをばたつかせていましたが、昼間^{ひるま}のりつ子の話を思い出しました。

「ねえ、りっちゃんのとりの家のしげおじさん、大阪^{おおさか}に働きに行ってるんだってね。大けがをしたんだってね。」

「りっちゃんに聞いたんかいの。やれやれ、早うなおりやええが。しげはうちの幹夫^{みきお}とおない年